

Speculative Solution

「推測的回答」

Robin Mackay ロビン・マッケイ

THIS IS THIS

これはこれ, 2

Quentin Meillassoux カンタン・メイヤスー

METAPHYSICS AND EXTRO-SCIENCE FICTION

形而上学とエクストロ=サイエンス・フィクション, 24

Elie Ayache エリ・アヤシュ

THE REAL FUTURE

現実の未来, 62

Bibliography, 76

Colophon, 79

This is This

ロビン・マツケイ

これはこれ

「観念の秩序」と「歴史の秩序」は、仮に一方が他方の偶発的事象に従って展開するとしても、依然区別して考えることができる。ある歴史的契機においてある省察を促す物や状況は、思考に選択圧を加える。思考におけるある種の転換は、ある種の物が伴って初めて生ずる。こうしてこの物は哲学の道具となり、理性という概念自体における変化の顕れ、あるいは、「思考のイマージュ」となる。

鍛冶屋の工房の音に耳を傾けるピュタゴラスから蜜蠟の塊を触るデカルトまで、この触媒作用をとらえた寸描——哲学者自身が伝える寸描も、他者の伝えるそれも（往々にしてその信憑性は疑わしいものではあるが）——は枚挙にいとまがない。これは、思考とは常にそれ自体の外部のものとの出会いによってもたらされるものだ、という我々の認識を示しているが、同時に、次のような確信をも裏付ける。すなわち、こうした寸描の伝達において、昔の思考実験を再演するにあたり、想像力がその立役者となっているのだ、と。

このことは、これら触媒となる物が、ストア派のいうところの「魂の鍛錬」の補綴であることを示唆する。哲学を技術——生（ビオス Bios）に関わる技芸ないし技術（テクネー techné）——とみなすストア派の考え方にお

4 いては、「訓練ないし鍛錬(アスケシス ascesis)のある種の形式が果たす役割」が中心的な位置を占めている[Sellars]。哲学的思考は、ただ理解されるだけでなく、生きたものにされなければならない。それゆえ、理性は想像力の可塑性と無縁のものではないのだ。

今日、「アスケシス」という観念は、想像力に逆らって理性の結論に服従すること(想像力がこうした結論とは相いれないものであるにもかかわらず)を含意するものとして引き合いに出されることが多い。悲しいかな、我々はストア派とは違い、科学的・哲学的結論の重圧に押しつぶされている。我々はこの結論を当然「受け入れる」だろうが、それを直観と調和させようともがくことはもはや諦めてしまったのだ。20世紀中葉になってようやく、「直観とは融通無碍の能力である」と主張し、「我々の子供たちは、おそらく相対論のパラドクスを直観的に明白なものとして難なく受け入れるだろう」[Nagel and Newman]と期待することが可能になった。

そして、進る想像力に耽ったりしそうなバートランド・ラッセルのような哲学者さえもが、次のように主張しえた。

ある理論が論理的に理解されても、それを感じ取るためには、さらに長く真剣な努力が必要とされることが多い。誤った、しかしより慣れ親しんだ理論による示唆のまやかしを、一つ一つ心から追い出し

て、外国語学習の場合でいうなら、それで考えたり夢見たりできるような種類の深い知識を獲得するためには、この[新しい]理論にどっぷり浸かってみることが必要なのだ。 5

ストア派のガレノスは、こうした哲学のアスケシスの二段階を「慣れ」と「消化」——概念の一種の新陳代謝——と説明した。マルクス・アウレリウスは、省察の反復によって「魂を染める」ことについて述べている。

汝の精神は度重なる想像のとおりになるであろう。なぜならば、魂は想像の色に染められるからである。それゆえ、魂をかかえる想像の連続で染めるがよい。(『自省録』)

哲学者たちは、挑戦的なテーゼを示すことを完全にやめてしまったわけではないが、こうしたテーゼにおいて「夢見る」努力を大方断念してしまい、想像力という色素にはほとんど信頼を置いていない。無色の思想、絶え間ない消化不良の不快感は、不可避のものとして受け止められている。

新たなメント・コギトの創造によって、思考の道具の実質的な重要性を明確にし、ストア派の概念を蘇らせる実験を、少なくともやってみる価値はないだろうか？ これは確かに、芸術家にとっての課題である。芸術家

とは、「劇化」のプロセスを通じて概念を直観の領域と結びつけることができる人々であるのだから。しかしながら、もっとも素朴な概念(そしてもっとも素朴な芸術家)は別として、これは物質的媒体における概念の単なる例証ないし置き換えではありえない。それゆえ、理性と想像力、そしてそれらを刺激する作品や物が、ひとつの共通の課題の中に参入していると再確認することだけが問題となるのではない。一方から他方へ一出会いから概念へ、そして逆方向へと至る曲がりくねった道を理解するという問題もあるのだ。というのも、想像力は概念に反応し、「魂を染める」のだから。

《Speculative Solution (思弁的=投機的解決)》[フロリアン・ヘッカーの作品]は、カンタン・メイアスーの業績によって先導される現代の哲学の刷新に参入し、根本的な偶発性について思考するための触媒となることを目指している。さて、こうした近年の思考のイマージュの変化そのものは、ある一連の流れの中にある。その流れの諸段階は、哲学的思考をもたらす再活性化してきた様々な物と出会いの集積によって刻まれるのだ。

二

想像していただきたい——あなたは頭脳明晰なスコットランドの哲学者、パリの賭博の巣窟の怪しげな半社交^{ドクトル・モリス}界に入り浸らんと、17世紀のフランスに到着したばかりだ。賭博場にたどり着くと、骰子遊びが行われている間、あなたは傍らをうろつき回る。こういった筋のことに慣れないあなたは、人目につかないようにしながら、ひそかに骰子の一つを吟味する機会をもらえる。等間隔、等サイズの六つの面を観察し、ある面がほかの面よりも出やすいと信ずる理由はどこにもなさそうだと結論付けると、あなたは、六つの数のいずれも等しく出そうだという経験則を採用することに決める。

この知識で身を固め、あなたは自信をもってゲームに加わる。回を重ねるにつれ、明らかに周囲のベテラン・プレイヤーたちを面白がらせたことに、あなたの骰子はほとんど毎回「1」の目を出すようだ。さあどうする？ (a)ここでは何かいんちきが行われていると声を大にして主張し、「いかさま」がどうなっているのかを確かめるために骰子を切り開くことを要求するか。あるいは、(b)あなたの仮説が役に立たないこと、こうしたゲームの結果の何を前もって見抜くことは出来ないらしいことが明らかになった以上、残された選択肢は、一回一回の骰子投げの結果を書きとめ経験からみじめに学習するか、大幅に軽くなったポケットとともにこっ

そり退散するかしかない、と結論付けるか？

- 8 上で劇的に描いた出来事こそが、理性の本質についての誤解(それは何百年にもわたって支配力をふるい、物質の存在そのものに関するポスト・カント観念論の懐疑のあらゆる問題を後世に残した)の根源である、というのが、ジャン＝ルネ・ヴェルヌ(哲学者でブリッジのエキスパートでもある)の著書『パスカル＝ヒューム原理と物理科学の基礎 *The Pascal-Hume Principle and the Foundation of the Physical Sciences*』の基本的テーゼだ。

この理性のカタストロフの原初的場面は、ビリヤード・ゲームだ。それは、ヒュームの『人間知性研究』で示された有名な「帰納法の問題」を導入する役割を果たしている、

たとえば、ビリヤードの一つの玉がもう一つの玉に向かって真っすぐ転がっていくのを目にするとき。たとえ二つ目の玉の動きが、玉同士の接触や衝突の結果として偶然示唆されていたとしても、この原因から同様に生じるかもしれない百ものさまざまな事象を想像できないだろうか？ これらの玉が両方とも完全に静止したままであることはありえないだろうか？ 最初の玉が真っすぐ戻ってきたり、二つ目の玉から跳ね返ってどこか別の経路や方向にいったりすることはないだろうか？ これらの仮定はすべて矛盾なく想像できることだ。そ

れならば、何故我々は、他の仮定よりも筋が通っていたり想像しやすかったりするわけでもないのに、ある一つの仮定を優先するのか？ 9
我々のいかなる超越論的演繹も、この優先の根拠を決して示してはくれないだろう。

一つの玉が別の玉の衝突をうけた時にどのように反応するかを演繹する先験的な方法はない。いくつもの結果が等しく考えるため、我々は因果律の合理的基盤を見いだすことができない。ヒュームによれば、我々はそれゆえ因果律を事物のなかに位置づける存在論的探求を諦め、代わりに、なぜ我々はそれがあると信じるのかという心理学的な理由(ヒュームによれば、現象のある種の「恒常的随伴」に対する我々の慣れがその理由)を考えなければならない。

ヴェルヌによれば、ヒュームの推論は、幾何学の確実性に範をとることをその本質的特徴とする、理性の「古典的」モデルから生じている。すなわち、ある幾何学的配置がある別の幾何学的配置を要求するのと同じように、現在のある事象は未来のある事象を要求する、というモデルである。

ヒュームは、先験的に行われる幾何学的推論に対し、因果律は充足理由律(「あらゆる物は、こうであってそれ以外ではないことの理由をもたねばならな

10 い」という公理)によってなされる要求という単なる仮説にすぎないことを示した。そうすることで、彼は充足理由律の規範的權威に疑問を投げかける。古典的理性がビリヤード玉の角度のコースの予測可能性に示されていると信じた、幾何学的理由と物理学的説明との等価を破壊しながら。ヒュームは理性的な思考のイメージを破壊し、いまや充足理由にしばられることなく、あまりにも取り留めがないため、より穏当な心理学的説明によって取って代わられなければならない、ある合理性を発見する。

次にヴェルヌは第二の哲学的寸描、確率に関する哲学的思想の誕生の寸描を登場させる。1654年、パスカルは友人のシュヴァリエ・ド・メレから骰子ゲームの戦術に関する助言を求められたとされている。パスカルはどの目が出る確率も等しい、つまり等しく考えうる物は等しく起こりうるという先験的確信を形成した。ヴェルヌによれば、パスカルはこの「確率の先験的法則」において、新しい、広がりを増した理性のイメージ、すなわち、要求するものというよりはむしろ確率論的である理性を発見するのだ。

それゆえ、たとえヒュームの哲学的推論の触媒がビリヤードゲームではなく骰子ゲームだったとしても、彼は先験的な確率法則を発見していただろう。その後、ビリヤード玉が実際常に同じやり方で相互作用するように思われることに気づくと、現実が「いんちき」であるのではないか——事物の中に、その振る舞いと、「等しく考えうる物は等しく起こりうる」というこの

先験的法則との相違を説明するような何かが隠されているのではないかといふことがたろう。この「何か」とは、我々が物質と呼んでいるものである。骰子の思考(確率)は合理的唯物論につながるが、この合理的唯物論において、ビリヤードの思考(幾何学)は、古典的合理主義を通じ、理性の見境ない放棄と、事物の人間的・心理学的側面についての思考に対する哲学の限界へと至るのである。

そのため、ヴェルヌによれば、もしヒュームが骰子に興じていたなら、我々は哲学(物質の現象外的現実性を確信することができないため、現象のみの吟味をよりどころにするもの)と科学(いかに「いんちき」かを発見するために現実をたえず切り裂くもの)との大きな断絶を回避することが出来ていたかもしれない。

三

ヴェルヌのテーゼに触発され、カンタン・メイヤーは、長い年月にわたってヒュームのビリヤード台の周りをうろつき回った。想像しうるあらゆる結果を概観するため、ヒュームが玉の力動的相互作用をその軌道の中に凍結させるあの瞬間を幾度となく調査しながら。彼は、この瞬間が、骰子の投げられた瞬間やルーレットの回転盤が止まる前の瞬間と本当に同じもの

だといえるのか、と自問した。

- 12 ついで彼は、(ヴェルヌもそうしたように)ヒュームの問題に対するカントの解答を検討した。自然法則のうつろいやすさを、想像を絶するほどの極みにまで推し進めた、背理法的空想における以下のような解答である。

もしも辰砂が、あるときは赤く、あるときは黒かったりするならば、またあるときは軽く、あるときは重かったりするならば、あるいはまた、もし人間があるときにはあの動物に、またあるにはこの動物にと姿を変えたりするならば、夏至の日の土地がある時は作物に覆われ、またある時には氷雪に閉ざされているなどということがあならば、私の経験的想像力が、赤色の表象によって重い辰砂を思い浮かべる機会を得ることは決してないだろう。

辰砂VSビリヤード…カントは専ら、経験はおろか想像さえもできないことを示すために、この場面を素描している。もし経験というものがあるならば、このことはそれ自体、自然法則が一定だということを立証する、とカントはいう。というのも、さもなければこの法則は十中八九、まさしくめぐるしい速さで変化し、いかなる一貫性のある経験も不可能になるだろうから、と。

メイヤサーは、ヴェルヌがヒュームの想像上の寸描一玉の衝突によ

てあらゆる結果が起こりうる(あるいは何も起こらない)瞬間—に対して行った変換を拒絶する。すなわち、こうした瞬間を、多数の可能性から単一の現実性への推移、つまり骰子の投擲から一つの目の確定への推移にすり替えてしまうという変換だ。メイヤサーはまた、不安定さを、不条理な「不可能性」に拡張してしまうカントの誇張(それは自然法則の安定性を賭け事と同様に考えてしまうことに起因するのだが)をも拒否する。実際、メイヤサーにとって、理性は想像力と全く同じ能力である。様々な結果を想像するそのキャパシティは、現実の中でたまたま起きる結果を超える。メイヤサーの考えでは、それはあらゆる確率の限界をも上回るのである。

宇宙を骰子と同じように想像することはできない。骰子の目は、現実の投擲よりも先に存在するのだから。カントの言に反して、我々の想像力は、確率という貧弱な限界を超える。宇宙には確率論が夢見ることが出来るよりも多くの物事がある。これは超限についての数学的理論に即して考えれば、きわめて正確な意味でそういえる。というのも、超限においては、非加算無限集合の部分集合はそれ自体無限であり、確率的推論を不可能にしてしまうからである。偶然性について考えるならば、我々は運ではなく根源的な偶発性を考えねばならない。安定した自然法則などというのは存在せず、あらゆる瞬間に、どんなことでも起こりうる(あるいは起こらない)。駄目だ。

もしそうなら、ビリヤードを骰子にすり替えるというヴェルヌの変換が引き
14 起こした問題に直面したときに、何が起るのか？ メイヤスーはまたもや
我々から唯物論的前提を奪ってはいないだろうか？ しがみつべき確か
なものとして残っているのは何か？

メイヤスーが示唆するのは、ビリヤード玉の衝突と、その玉の取りうる諸々
の数知れぬ軌道との間の、ちょうどあのかりそめの瞬間なのだ。
ヴァニシング・モーメント

まさにこうした瞬間(このことは覚えておかれよ)、ヒュームは、理性とはい
かなる特定の結果をも先験的には保証しえないもので、我々は現実の
法則ではなく心理学的法則で我慢しなければならないのだということを
認めたのである。メイヤスーがこの瞬間を確実につかむのは、ヒュームに
従いつつも、いっそう強められた目的をもってこの瞬間を探るときだ。安
定した自然法則というテーゼを正当化しようという試みにおける理性の
「失敗」は、実際には真の「知的直観」である。我々は、その知的直観
にもとづいてのみ、なぜ物理の世界がこうであってそれ以外ではないの
か(今や確率にさえ縛られることなく、そうありうるのだから)を理解する
ことが期待できるのである。科学の基礎づけ、そして科学と哲学との新
たな出会い、自然という「いかさま骰子」の経験主義的切開を通して
ではなく、このたった一つの点、この知的直観の拡張の瞬間、つまりは
根源的偶然の瞬間をめぐる先験的原理に集中することを通じてなされる
だろう。

これぞ、ヒュームの問題に対するメイヤスーの「思弁的解決 speculative
solution」である。このたった一つの必然に自らの心をじっと定め、それ
15 を何度も繰り返しては置き換え、ビリヤード・ゲームに偏執的な注意を
払い続けながら、メイヤスーは一方で、ヒュームの致命的に安易な譲歩
にも、ヒュームを賭博師の論理へのすり替えるヴェルヌの変換にも抵抗し、

「法則がきれいさっぱり廃止され、いかなる理由もなく、あらゆる
瞬間に、ありとあらゆることが起こりうる」

というこの決定的瞬間に狙いを定める。

ヒュームの発見がそれ自体の肯定的地位を獲得すると、理性は、自然
法則のあらゆる見かけ上の安定性の背後にある、この「ハイパーカオ
ス」の絶対的必然性を明らかにする。この必然性とは、(古典的合理主
義でのような)他のあらゆるものに保証を与える何らかの(神聖な)実
体の絶対的必然性ではなく、あらゆる保証を永遠に溶解させる、実
体なき必然性である。

これは、考えたりその帰結全体を追跡したりすることが極めて難しい
ものである。メイヤスーが指摘するように、この理性の課題を遂行する
試みは、想像力の課題でもある。「エクストロ=サイエンス・フィクシ
ョン」的想像の発

達を通して実行される課題、それは、根本的偶発性の上に成り立っている世界——つまり我々自身の世界を想像するという課題なのだ。

四

エリ・アヤシュは、コンティンジェンシー根源的偶発性のなかに住まうというこの課題を自らのものにしてきた。彼はこの根源的偶発性の世俗的媒体を発見したと主張する。コンティンジェント・クレームすなわち、条件付請求権の市場である。

アヤシュは次のように論じている。金融資産の査定に関する学術的理論は、価格を確率関数の出力として計算すると主張する。一方、立会場の現実の中では、価格は、その絶え間ない再キャリブレーションによって、まさにこうした計算を刻一刻と超えていくものなのだ。実際、こういった交換は、またそれゆえにプライシング（価格付け）理論は、次のような場合においてのみ意味を成すのだ。すなわち、確率によって予測可能なものではなく、条件付請求権の契約のもとで、ある未来の現実を予期して、引受・交換されるフューチャー未来/先物の中に、自身が既に入り込んでいることを知っている限りにおいて。そして、こうした未来/先物の現実、実現された後も——今日、それが現在の市場において偶発的で

あるのと同じぐらい——偶発的でありつづけるのだ。

したがって、アヤシュのいうように理論と市場の現実が釣り合っていないのは、こういった理論が、どこかほかのところから——コール・オプションや条件付請求権一般のストライク権利行使からではなく、ルーレットの円盤や骰子から——不適切なモデルを持ち込んでいるところからきている。このモデルは、他ならぬ市場の現実にはいかなる余地をも与えていない——それなしではそもそも価格というものが問題にすらならないだろう、あの現実には。市場の理論は、「うまい話」を作らんとして「XSFの問題をSFの問題と取り違え」、市場の現実の偶発性をその説明から締め出してしまう。

我々はここで、優先順位を逆転させないように注意せねばならない。偶発性——価格によって刻まれる事象の秩序——に住まうこととは何を意味するのか、という省察にアヤシュを導いたのは、市場であった。価格とは、いかなる多樣的可能世界の枠組み（骰子の目）にも予め封入することができないものだ。価格において、人はいつでもあのかりそめの瞬間に舞い戻る。ビリヤード玉の衝突ともう一つの玉の反応との間の、可能性を超越したあの空間に。そうした瞬間には、「百もの」（ヒューム）、あるいは超限の（メイアスー）「さまざまな事象」が、「同様に生じるかもしれない」のだ。

アヤシュのチームは、プライシング理論によるSF的想像の欠陥を修正するため、プライシング・ソフトウェアの再概念化に乗り出していた。この再

18 概念化は、アヤシユがメイヤスーの著作をたまたま目にした時、偶然にも
ぴったりの哲学的テーゼに出くわした。幸運な偶然が、デリバティブ、条
件付請求権、ストライク、スマイル、動的レプリケーションといった難解な語
彙とある種の哲学の根本問題との驚くべき重ねあわせを見出す、前途有
望な哲学的研究課題をもたらした。それはまた、こうした哲学の問題に、
ある種の現実世界的な緊急性を添えるものともなるのである。

というも、ここにきて未来は、また、それゆえ価格は、予測と確率の「不
健全さ」——未来の生産を先在する様態からの推定可能な選択へと
減じてしまう、こうした不健全さを差し引かれるのだから。そして、この差引
は、リスクや報酬の計算を超えて、我々の世界を真に偶発的なものへ、
そして条件付請求権の直接の翻訳である価格へと開いてくれる。我々
が考える必要があるのはここなのだ。

五

我々の本来の問いに戻ろう。ヘッカーの作品は、近年の哲学史の一連
の流れを司ってきた哲学の補綴の奇妙な型に、いかにして加わりうるの
だろうか？ 音響は、どんな種類の思想を生じさせ、どんな種類の魂の鍛

錬を促進することができるのか？

19 聴取において、我々は原料から「様態」を得るために、たえず「付加的な
努力」をしている。この原料は、ほかならぬそのありのままの姿——純粋な
強度の差異——として我々を打つ。これこそが、それ自身との差異でありそ
の偶発的な特徴、聴取の要素それ自体であると同時に決して聴かれえない
ものでもある何か（ドゥルーズならaudiendumと呼んたであろうもの）である。

ヘッカーの音響心理学的実験は、確率計算として容易に説明しうるも
のにしたがって音響という原料から対象を構築することにおける、想像力
の能動的な役割に焦点を絞っている。この確率計算とは、漸進的要請と
文化的条件付けによってその「先行物」が我々に伝えられる計算である。

《3 Channel Chronics》のような作品にも示しているように、音響体が^{オブジェ・ソノール}
どのようであるか、またそれが何をなしうるかといったイマージュは、これら
の先行する偶発的事象によって条件づけられている。こうした先行の偶
発的事象は、選択と整理のメカニズムを導入するが、諸々の音響素材は
このメカニズムを通じて、以下のように二重に分節化されるのだ。すなわ
ち、解体され直交させられ、「コンテンツ」の配置空間を指定する、様々な
時間軸。そして、その中に「認識」されうるバラバラの対象から抽出され
た意味である。五線譜、シーケンサーのタイムライン、あるいはサンプリング
の波形といったテクノロジーは、生物学に属する分節を実質的に中継して

20 いる。音響生成の様々な方法は、音響の多角的・自然発生的「形而上学」を実際に具現化し、時間をラミネートする様々なやり方や、音響体の様々な定義を提供する。作曲の種々の図式は、一般にこうした層状の連なりをその文化的分枝と組み合わせる。とりわけ、音楽の「形而上学」を脱出するための方法として開発された、偶然性による作曲の枠組みでさえ、その枠組みが「可能」にした作用だけを「生じさせる」という、もう一つの（確率論的な）枠を打ち立てたにすぎないのだ。

ケージが批評家たちに向かってしばしば指摘していたように、チャンス・オペレーションの使用は、もはや決定を下さないということではなく、むしろ、異なる決定を下すことを意味していた。もはや答えを決めることが要求されなくなると、彼は代わりに問いを決めねばならなくなった。プロセスが要求されたとおりのやり方でなされるべきだとすれば、これは決して易しくはない課題であった。[Millar]

ヘッカーの作品は、異種混交の「形而上学」を活用し、こうした形而上学によって音響素材の分節が崩壊する極限性を描くことにおいて、ミニマリズム的ないし直解主義的な提示へとむかう。この提示において、客体は届し、我々はこの音のシーケンス固有の存在の罅に立つ

——あるがまま以上の何物でもないその姿を突き付けられながら。このような瞬間、異なる時間軸を「垂直に」差異化し、音の「意味を成す」過去把持と未来予持を「水平に」作動させることを我々に許す階層化されたシステムは、メイヤスーによる時間のハイパーカオス理論に対応する「純粋な年代記」へと融解する。

しかし、もちろん、ハイパーカオスの音響化——有限の作品の中で、ハイパーカオスの世界に住むとはどのようなことかを叙述すること——は不可能だ。「極限的な予測不可能性」の物まねをすることは、重要な点を見誤ることとなる。重要なのは、聴き手をカオス的な変化の様態、あるいは万物流転へと陥れることではない。聴き手を偶然の作用にさらすことでもない。偶然とは、変化や停滞と同様に、もっぱらハイパーカオスからの無限小の引用でしかありえない。そのハイパーカオスとは、メイヤスーが四苦八苦して指摘したように、見たところは果てしなく安定している恒常性の期間を、果てしない激しい変化の期間と同じぐらい認めうるものなのである。

ハイパーカオスは、ジャンルや様式、様態、実体などではありえない。それはただ、静かでも騒々しくもなく、荒々しくも穏やかでもなく、混沌でも静穏でもなく、有機的でも非有機的でもなく、秩序的でも無秩序的でもない瞬間の中に住まうことでしかありえない。ハイパーカオスの瞬間を生

22 きるためには、もはや必然的実体という観点から思考するのではなく、自らを実体なき必然へと向かわせることが必要なのだ。

もしヘッカーの実践とハイパーカオス——「事物の年代記」にしがみつくよりほかない世界——の概念が、お互い「のために作られた」もののように見えるならば、これがまさにそれにあてはまるように思われる、より表層的なやり方は、思考の付加的な努力を要する一層深遠な概念の結びつきを明らかにするために、ひき剥がされなければならない。

《Speculative Solution》の野心的な賭けは、ヒュームの習慣化の法則の皮肉な行為遂行的使用を含んでいる。この法則を生じせしめた誤謬の、メイヤスーによる取り消しを完成するために。すなわち、想像力のメカニズムを用いて、そのメカニズムを固有のイマージュなき要素——それはまた、理性の要素でもある——へと引き渡すという、魂の鍛錬だ。

作品は、ひとつの回路に加わる。その回路の中では、作品、付録テキスト、そして他の様々な物体が、あらゆる優先順位、表象、参照そして実体さえをも全滅させるにちがいない、果てしない触媒作用の一部になる。この回路をメリー・ゴー・ラウンドのように巡り巡って、思想のイマージュは、イマージュなき音によって駆り立てられる渦巻くイマージュのサイクロトロンの中かで、炸裂させられるだろう。骰子、ビリヤード、辰砂、エキゾチック・スマイル、ルーレットの回転盤、麦角病のパン…

異種混交の思考実験《Speculative Solution》——取扱説明書にして謎かけ、聖書にして処方箋、慢性向精神薬にして「魂の鍛錬」でもある実験——は、あの「魂の染め上げ」、「存在の差異化のマークの中に、存在とは何かという認識や再確認ではなく、存在を最終的に思考と存在との相互作用の中に閉じ込める内省的思考でもなく、この存在が違うものであったかもしれないというむき出しの暗示を見る（「これはこれ」）という、あの「難解で反直観的な…まなざしの回心」を促すだろう。

反復される音の投与によって「回心」させられ、エクストロ=サイエンスのファンタジーの色に染められて、こうしたまなざしは、このテキストを変容したやり方で「読む」ことさえできるだろう。すなわち、もはや、（その主題の本質が今や廃れてしまった）教訓的な哲学テキストとしてではなく、紙の上のマーク、あるがままであることにはいかなる理由も持たず、また——なおも、いついかなる瞬間にも——異なるものであったかもしれない、まったく「文字通りの」マークとの、ミニマルな出会いとして。この「むき出しにされた」まなざしだけが、こうした寄せ集め全体を完成させることが出来るのだ。その未来のエクリチュールが（デュシャンが「予言した」とおり）視る者/聴く者を鍛錬し続けるような作品として。

これはこれ。

Metaphysics and Extro- Science Fiction

カンタン・メイヤスー

形而上学とエクストロ=サイエンス・フィクション

本稿では、フィクションにおける二つの体制の^{レジャー}違いを説明したい。形而上学的な見地から重要だと思われる違いである。このフィクションの二つの体制は、実験科学に関わるものだ。私はこれに、かたやよく知られた語、かたや自らの造語である二つの語を用いるだろう。すなわち、サイエンス・フィクションとエクストロ=サイエンス・フィクション、SFとXSFである。

こうした違いの意味を論じる前に、まずある種の誤解や不測の反論を避けるために、はっきりさせておきたいことがある。私はサイエンス・フィクションに、かなり凡庸だと思われる定義を与えることになる。それを、私がエクストロ=サイエンス・フィクションと呼ぶものと明確に区別するためだ。しかし、ひとたびこの定義が与えられると、おそらく、読者はこんな疑念を抱かれるだろう。すなわち、サイエンス・フィクションとよばれる文学ジャンル自体、すでにエクストロ=サイエンス・フィクションを含んでいる——SFの中にXSFの本の諸々の実例がある——のではないか、またそれゆえに、SFというジャンルは私の提示する区別と矛盾しているのではないかと。この点についてこの場で議論することが私の意図ではない。むしろ、ある概念上の区別を引き立たせ、その哲学的重要性を示すことをもくろんでいるのである。そうすれば、エクストロ=サイエンス・フィクションの物語は未来派文学の中にすでに存在しているか否か、そして、サイエンス・

26 フィクションというジャンル自体が、提示された概念上の差異を含むか否かを、サイエンス・フィクションの専門家は自ら決めることができるのだ。私の主張はこうだ。もし、[エクストロ=サイエンス・フィクションという]こうした物語が存在するならば、それらはSFというジャンルの中に入ろうと入るまいと、実のところサイエンス・フィクションとは大いに異なるものに属しているのだ。と。そしてこれを受け、こういった物語はその非凡さゆえに、ある意味では「ジャンルの中のジャンル」、「帝国の中の帝国」を構成するとみなされる資格があるのだ、と。

1. サイエンス・フィクションとエクストロ=サイエンス・フィクション

それでは、このSFとXSFの区別に進もう。

一般に、SFにおけるサイエンスとフィクションの関わりは次のようであるようだ。すなわち、科学の架空の未来を、知識や現実支配の可能性を変化させる(多くの場合その可能性を拡げる)ものとして想像する、というものである。未知の可能性を拓くこの科学的知識の変化に伴い、人間と世界との関係が変化するのがみとめられる。サイエンス・フィクションでは、起こりうる未来は——どれほどの大変動を伴っていたとしても

27 ——科学の範囲内に収まっている。それゆえ、あらゆるサイエンス・フィクションは暗黙のうちに、「予期される未来でも、世界を科学的知識に従わせることはまだ可能である」という原則にしたがっている。科学は著しい変化をこうむるかもしれないが、いつまでも存在していくだろう。以上のことから、この種の文学に当然与えられる一般的名称すなわちフィクションは、極度の変化を、しかしあくまで科学の内部において、もたらしうるものである。こうした科学は、たとえその可能性の変化ゆえに見分けのつかないほど変わってしまったとしても、それ自体は依然存在し続けるのだ。

さて、科学外世界のフィクション、あるいはXSFによって、我々が言わんとしていることは何か？我々は、「科学外世界」という語で、単純に科学が存在しない世界——つまり、実験科学が実際存在しないような世界、たとえば、ひとびとが現実への科学的な関わりを發展させてこなかった、あるいはまだ發展させていない世界——のことを言おうとしているわけではない。「科学外世界」とは、実験科学が実際に未知であるというよりは、むしろ原理的に不可能であるような世界のことを指す。したがって、エクストロ=サイエンス(科学・外)・フィクションとは、いかなる実験科学もそのなかに対象を構成できないようなやり方で構築された——あるいはむしろ脱構築された——世界を思い浮かべることが問題とな

る、想像の独自の体制を定めるものである。XSFの指導問題は次の通りだ。すなわち、科学的知識にとって原理的に太刀打ちしがたいもの、自然科学の対象として打ち建てられることのできないものとなるためには、世界は一体どのようでなければならないのだろうか？

ここで私のねらいは、こうした科学外世界エクストロ=サイエンスの定義——今のところまだ非常に一般的かつ単に否定的なものでしかない——に、正確な概念的内容を与えることだ。同時にそれは、私の考えるに、一方ではサイエンス・フィクションとエクストロ=サイエンス・フィクションとの違いを意識すること、他方ではSFとは区別されるXSFタイプの想像力を養うことの中にあるかもしれない、厳密な意味で思弁的な重要性を示すという問題でもある。

私がエクストロ=サイエンス・フィクションに関心を持っているのは、それが、きわめて古典的な形而上学的問題の源泉であるからだ。私自身長きにわたって取り組んできたこの形而上学的問題とは、帰納法の問題、より正確にいうと、哲学者デイヴィッド・ヒュームによって『人間本性論』のちに『人間知性研究』で提示された、自然法則の必然性の問題である。さてこの問題は、20世紀のもっとも重要な認識論者の一人、カール・ポパーによって、著しく誤解されたようだ。ポパーは「ヒュームの問題」という表現をもってこの帰納の問題に言及した最初の人物を自

負しており、この問題に対する厳密かつ独創的な応答を行ったと主張する。私は、ポパーによるヒュームの誤解は、まさに彼がXSFの問題をSFの問題と取り違えたという事実から来ているのだと示すことから始めよう。ポパーはヒュームの問題とはまったく別の問題、別種の想像力が働いていることを示唆する問題を提示した。というのも、もしヒュームが自らの問題を提示するのに、私の考えでは、エクストロ=サイエンス・フィクションの想像力を働かせたとすれば、ポパーによって提示された問題は、サイエンス・フィクションの想像力によってのみ想像しうるものだからだ。

第二に、『純粹理性批判』、より正確にはカテゴリーの客観的演繹の中で、ヒュームの問題に対するカントの応答を検討する。ポパーと異なり、カントはヒュームの問題の本質を見誤ってはいない。彼は、科学が不可能になった世界を想像する、というヒューム自身の土俵の上で応答を行っているのである。しかし、私はカントのテーゼにも批判を加え、彼の超越論的演繹の弱点は、十分に発達していない、いわば偏狭なエクストロ=サイエンスの想像力に由来するのだということを示そう。そして、より鋭いエクストロ=サイエンス・フィクションの感覚が、ヒュームの問題に対し、ポパーのともカントのとも異なる第三の応答を打ち出すことをいかに可能にするかを示そう。

2. 二つのビリヤード・ゲーム——ヒュームとアシモフ

ヒュームがその有名な因果の必然性の問題を提示しているパラダイムのテキストは、動力学の法則があてはまらなくなってしまう、ある架空のビリヤードのゲームを描いたものである。

たとえば、ビリヤードの一つの玉がもう一つの玉に向かって真っすぐ転がっていくのを目にするとき。たとえ二つ目の玉の動きが、玉同士の接触や衝突の結果として偶然示唆されていたとしても、この原因から同様に生じるかもしれない百ものさまざまな事象を想像できないだろうか？ これらの玉が両方とも完全に静止したままであることはありえないだろうか？ 最初の玉が真っすぐ戻ってきたり、二つ目の玉から跳ね返ってどこか別の経路や方向にいったりすることはないだろうか？ これらの仮定はすべて矛盾なく想像できることだ。それならば、何故我々は、他の仮定よりも筋が通っていたり想像しやすかったりするわけでもないのに、ある一つの仮定を優先するのか？ 我々のいかなる超越論的演繹も、この優先の根拠を決して示してはくれないだろう。

ヒュームがこの架空の場面を通じて提起する問題は、もし経験も論理もそれを我々に確信させてくれないのだとすれば、物理法則が一瞬後にも有効であり続けるだろうということ、何が真に保証するのか——そればかりでなく、何が我々にそう確信させるのか——を知る問題だ。というのも、未来に法則が変化する、と想像することには、いかなる論理的矛盾もないのだから。そして、過去における法則の恒常性のいかなる経験も、この恒常性が未来でも継続すると推測することを許さない。ヒュームは、過去の経験的恒常性の習慣のみが、我々に、未来も過去に似ているだろうと確信させるのだと結論付ける——彼自らが提示した問題に対する心理学的解決である。そしてこの解決は、ヒューム以後、彼が結論を出さんとして発したその課題を自ら解こうと試みた人々——特にカントとポパー——を満足させるものではなかった。

最も新しい解決から始めよう。有名な『科学的発見の論理』において手掛けられ、その後の著作でさらに追究された、ポパーによる解決である。

ポパーの解決の原理は非常に単純だ。もしポパーに、ヒュームのビリヤード玉が上述の突飛な振る舞いをしないことを保証するものは何か、と尋ねたなら、彼は、こんなふうに答えたことだろう。保証するものは何もない、と。そればかりか、こうも言っただろう。結構なことだ、これらの可能性には突飛なところなど何もないのだから——こうした可能

性は、まったく真剣に受け取られなければならないのだ、と。なぜなら、ポパーにとって、我々の未来予想とは、新たな(つまりまだ正典化^{カノン}されていない)科学実験によって本質的に反証されうる理論的仮説であるのだから。ポパーにとって、理論を科学的にするものとは、それが原理的に実験によって反証可能なものであるという、まさにその事実なのである。実験科学のダイナミズム——すなわち、物理学者たちが新しい仮説へと進み、古い仮説を退け、対抗理論を厳しい実験に提出するという絶え間のない運動——を説明するのは、科学的推測のこうした本質的な反証可能性なのだ。

こうした場合、ポパーやその後の経験主義者たちのようなやり方で、明日も太陽は昇るとか、生けるものはすべて死すべきであるとか、パンは栄養になるとかいったことを何が我々に保証してくれるのか、と問うのは無駄だ。これらが全く必然的でないということを、しかるべき理由によって我々に対して保証しうる——あるいは保証すべき——ものは何もない。そのうえ、それらが常に真実であるとは限らない。ポパーは『客観的知識』で次のように書いている。

三つの例すべてにおいて、これらの既定の法則が、実際には、その元来の意味において反証可能だということに気付いた。

(a) 第一の例は、マッシリアのピュテアスが「凍れる海と真夜中の太陽」を発見したときに反証された。(a)の意味が「どこに行こうとも、太陽は24時間に一度昇っては沈むだろう」というものであったという事実は、彼の報告に向けられた完全な不信によって、またその報告があらゆる旅行記の範例となったことによって示されている。(b) 第二の例——あるいはその元になったアリストテレスの理論——もまた以下のことによって反証された。すなわち、細胞分裂による繁殖は死ではないためバクテリアは死なないという発見によって。また後には、すべての生物は十分に抜本的な手段をもってすれば殺すことが出来るように思われるにもかかわらず、必ずしも生き物一般が崩壊したり死んだりするわけではない(たとえば癌細胞は生き続けることが出来る)、という認識によって。(c) 第三の例——ヒュームのお気に入りの例の一つであった——は、日々のパンを食べた人々が麦角病で死んだ(ついこの間、フランスのある村で起きた悲劇的な事例である)ときに反証された。

ビリヤードの玉の衝突の事例に戻ると、ポパーに従うならば、我々はこんな風に言わなければならないだろう。未来では、次のような理由で、玉が実際に思いもよらない動きをするかもしれない。すなわち、実験の状

況を変えたから(たとえばボールを金属製にする、強力な磁場を発生させるなど)、あるいは、玉が動いている重力場に変化を与えるやり方が、いつの日か発見されるかもしれないから、と。

さて、なぜ私は、こうした解決がヒュームの『人間知性研究』において立てられた本来の問題に対する誤解によっているといったのか? まず、ポパーの解決がサイエンス・フィクションのそれと同質の想像に属していることに注意しよう。実際、科学的理論に関して「反証主義」は我々に何を認めるよう要求するか? その理論が将来、現時点ではまったく予期されていない他の諸理論によって書き換えられるかもしれない、ということだ。こうした反証としてポパーの挙げた例は、もちろん、過去に属している。しかし、彼の認識論の原則は、急進性という点で既に生じた断絶(たとえば、一般相対性理論や量子物理学ほどに18世紀の人々にとっては革命的で予測不可能であった理論に取って代わられたニュートンの理論が経験した断絶)に匹敵するほどの科学的断絶の可能性を、未来に投影することにある。たとえ未来の物理学や未来の生物学がどのようになるのかを知ったり予知したりすることができないとしても、我々は、現在の科学が過去の時代の科学と比べてそうであったのと同じぐらい、現在の科学とはけた違いの実験科学が到来する可能性を受け入れなければならない。ポパーの認識論に従うためには、それはまさしく、サイエンス・フィ

クション(しかし不確定なサイエンス・フィクション)を心に描くという問題なのである。なぜなら、我々は、未来の科学の明確な中身を作り上げるというより、むしろ、そうした中身の——おそらく現在の我々の知識からすると根本的に違った——存在を、来たるべきものとして仮定することに甘んじるのだから。

それでは、ポパーはどのようにヒュームを誤解しているのだろうか? ポパーが実際に提起しているのは、次のような問題だ。すなわち、「我々の理論は将来新たな実験によって反証されうるだろうか」、と。彼の問題は認識論的で、我々の科学的知識の本質に関わるものである。それはヒュームの問題のような存在論的なものではない。ヒュームの問題は単なる科学理論の恒常性ではなく、物理法則が説明するプロセス自体の恒常性に関わるものだ。この問題に、ポパーは全く立ち向かっていない。ポパーは、新しい経験が我々の理論を反証するかもしれない、という。しかし、彼は既存の、公式に認められた実験が、未来永劫同じ結果をもたらし続けるだろうという点については決して疑っていない。全く同様の状況であれば、同じ実験は常に同じ結果をもたらすだろう、予想外の環境のみが予想外の結果をもたらすだろうと。このことは彼の提示する例からも非常によく見てとれる。太陽が24時間ごとに昇らなくなるのは、極地付近のみである。パンが栄養にならず人を殺すのはただ単にバ

クテリアのせいだ。もとのままの環境においては、太陽が突如として重力に従うのをやめたり、たまに太陽系の外側へと旅立ったりするのを我々が目にするのは決してないだろう。栄養を与えてくれるパンと同一の組成のパンが、何の理由もなしに突然それを食べる誰かを死に至らしめるようになったりもしないだろう。というのも、仮にそのようなことが起こるものなら、我々はもはや、新しい経験を説明するために理論を覆さざるを得ない科学、ではなく、物理法則そのものの崩壊によって不可能になってしまった実験科学、を扱っていることになるだろうから。

しかるに、ヒュームによって提起された真の問題は、この科学そのものが不可能になった未来世界という仮説なのである。ポパーの問題——我々の理論を保証するのは何か？——はサイエンス・フィクションの問題、未来においても依然として可能な科学が存在することを前提とするフィクションによってもたらされた問題だ。しかしヒュームの問題はもう一つの想像、エクストロ=サイエンス・フィクションの想像を動員する。エクストロ=サイエンス・フィクション、それは、もはやいかなる科学理論も現実に適用することができないほど無秩序になってしまった世界のフィクションだ。そして、フィクションの二つの体制——SFとXSF——の違いが真の形而上学的争点にかかわるといえることが、ここでは非常によくわかる。なぜなら、ポパーはその違いを誤解したために、自身

の認識論的な問題をヒュームの存在論的問題と混同する羽目になったのだから。

ヒュームの問題とポパーの問題の違いをまとめるにあたって、ビリヤード玉の突拍子もない軌道の例に戻ることが出来よう。ヒュームによれば、問うべき問題はこうだ。「玉が、予期しないものであるばかりでなく原則的に予測不可能な軌道(既知のあらゆる法則のみならず、知られるだろうと考えられるどんな法則をもすり抜けてしまうので、模ることができない軌道)をとらないということ、何が保証するのか？」ポパーによれば、問うべき問題は次のようなものとなる。「未だ知られていない法則と結びついた新奇な状況は、未来のある不確定な時点において、我々が、まったく思いがけない(しかし未来の科学にとっては原則的に予測可能な)軌道にボールを送り込むことを許さないかもしれないということ、何が保証するのか？」最初の問いはサイエンス・フィクションの限界を超え、二つ目の問いは専らその内側に属している。

ところで、この違いを完璧に——あたかもわざわざこのために書かれたかと思われるほど完璧に——例証しているサイエンス・フィクションのテキストが存在するのだ。アイザック・アシモフの小説「無重力ビリヤード The Billiard Ball」である。この小説は、SFの物語をミステリと組み合わせるといふアイデアによる作品集『アシモフのミステリ世界 Asimov's

Mysteries』中の最後の作品だ。アシモフはこの本で、アガサ・クリスティ風の推理小説をSFというジャンルと融合させて楽しんでいる。「無重力ビリヤード」において、アシモフは、理論物理学の天賦の才に恵まれ、相対性理論をその専門とする一人の容疑者——ビリヤードの玉を使って犯された殺人の容疑者——の話を物語る。さてこれからみていくように、筋立て全体は、まさにビリヤードの玉の思いがけない軌道に基づいているのである。だが、この筋立ての核心は、こうした[軌道の]説明不可能性を、ポパーの問題の枠組み——サイエンス・フィクションの想像の領域内——と、ヒュームの問題の枠組みのいずれにおいて理解するか、という問題以外の何物でもない。

ひとたび話の筋を説明すれば、すべてははっきりするだろう。小説の語り手の科学ジャーナリストは、私的な覚え書の中で、彼の時代の最大の科学者ジェームズ・プリス博士に殺人の疑いをかけていることをほのめかす。彼は次のように出来事を語ってみせる。ジェームズ・プリスは、同時代のいかなる科学者よりも誉れ高い人物であるが、いつもエドワード・ブルームの日陰にとどまっている。ブルームは、理論的な才能を欠いているにもかかわらず、同時代の最も抽象的な理論、とくにプリスの理論を応用することにかけては天才的な才能を発揮するのだ。プリスの名声がプロフェッショナルな科学者としての限られたそれを決して超え

ないものであったのに対し、ブルームは一種のスーパー・エジソンで、具体的な発明とその莫大な金銭的結果を通じて著しく裕福かつ有名になっている。ともに相手の持っているタイプの知識をひそかに妬んでいる二人の男の間で、暗黙の敵対関係と一種の相互の嫉妬が進展する。この敵対関係は、どちらも手ごわいプレイヤーとして知られるプリスとブルームが若いころから習慣にしてきた、週に一度のビリヤード・ゲームにおいて結晶する。

友好的・市民的な外観のもとに隠されたこの敵対心は、ブルームがプリスの反重力場の理論を応用したと主張する時、白日の下にさらされることになる。プリスはこの理論において、電磁場によって重力に逆らうことであらゆる重力効果を消去するという理論的な可能性を予見し、二つ目のノーベル賞を受賞した。ただし、プリスによれば、この理論的可能性は実践面では不可能なものである。なぜなら、そうした効果は無限大の電磁場を要するものであるため、技術的に実現不可能であるからだ。ブルームはこれに異を唱え、無限大の電磁場なしで反重力マシンを作ってみせようとする。二人の男の間で緊張が高まり、両者の名声はのるかそるかの賭けにさらされる。ついに一年後、ブルームは成功したと告げる。彼は自らの成功の最初の公開デモンストレーションに出席するよう、世界中の新聞やテレビを招待する。そしてもちろんのこと、虎視眈々と

40 してプリス教授を呼ぶ。その素晴らしい理論の輝かしい応用を、全世界の前で見届けるようにと。

全員が揃ったところで、ブルームは自らの実験室へと観客をいざなう。そこには誰をも驚かせる装置が待ち構えているのだ。部屋の中央には、たくさんの実験器具に囲まれた、一台のビリヤード台がある。そして、この台の中心には、まばゆいばかりの垂直の光の帯が走っている。ブルームはここで次のような説明をする。自分は、もちろんうまくいくと確信してはいるけれども、まだ有形物で反重力光線を試したことはない。というのも、そうする栄誉はプリスのためにとっておきたいと思ったからだ。プリスによってビリヤード玉を中央の光線の下に送り込んでもらいたいのだと。—— 科学者へのオマージュという体裁をとった、このうえない悪用である。それによってプリスは、永遠の負けとなるビリヤードゲームでライヴァルの功績を認め、全世界の前で自らを笑いものにするようになるのだから。ブルームの予測によれば、彼らは、ボールが光線の中で重さを失い、ゆっくりとその最高点まで昇って行くのを目にすることになるだろう。光線の明るさのために観客はサングラスを着用している。そのため、ブルームがこの発表を行ったときのプリスの表情を見ることはできない。最初麻痺したようになっていたプリスは、我に返ったようにみえる。彼はビリヤード台に近付いて、ゆっくりと狙いを定める。

彼はボールを打つ、それは複雑な軌跡を描き、跳ね返り、そしてついに光線の中に入る。雷鳴のような音が轟き、皆はパニックに陥る。そして静けさが戻った時、ブルームは死体で発見される。ちょうどビリヤード玉大の穴を、胸にすっぱり貫通させて。

かくして、全く予期せぬ出来事が起こる—— 玉は、我々の物理学、^{リアル}現実の物理学ばかりでなく、プリスとブルームの架空の物理学からみても常軌を逸した軌道をたどったのだ。もしこの物語がヒューム的なもの——つまり、エクストロ=サイエンス・フィクションの物語——であるならば、この常軌を逸した出来事についてこれ以上言うべきことはなく、我々はプロットから置き去りにされてしまうだろう。しかし、これは幸いにも——ヒューム的ではなくポパー的な——サイエンス・フィクションの物語であり、プロットは鮮やかな結末で締めくくられる。プリスは物語の中で、初めは——彼が言うには、周知のとおり頭の回転がのろいために——気づかなかったという、以下のことを説明するのである。すなわち、重力から解放された物体は、無重量物体のとりよ様な静かな動きをするのではなく、無質量物体の速度、つまり光子の速度、光の速度で跳ね飛ばされるのだと。物語はそれゆえ、こんなふうに不安げに思いを巡らせる語り手とともに終わる。すなわち、衆目の前で自らの名誉を傷つけられる危険に直面したとき、プリスは、何が起こるか気づいていたのだろうか。ライヴァ

ルに対し永遠の報復をするためにビリヤード玉に必要とされるアングルを計算する暇が、彼にはあったらどうか、と。

お分かりの通り、物語は、それがポパー的であるからこそ機能する。なぜならこの話は、全く思いがけない出来事も、物理法則がそれを説明することができる以上、原理的には予測不可能ではない、という事実に基づいているからだ。物語の核心は、プリスは実際には何が起こるか予想していたのではないか、という、永遠に立証できない可能性そのものにあるのだ。物語が機能するためには、予知が可能でなければならない。それゆえ事象は法則に従わなければならない。たとえその法則があまりにも前代未聞のものであるため、我々の疑念が永久に疑念のままとどまろうとも。

この物語の事例を超えて、我々のフィクションの二つの体制の、今度は形而上学的ではなくれっきとした文学的な価値に関する、より一般的な結論が生じると思われる。サイエンス・フィクションだけが空想小説の、物語の枠組み——現実離れはしていようと確かに一貫性のある枠組み——の構築を許すように思われるのだ。サイエンス・フィクションでは、我々は一般に異なる物理学が支配する世界に住んでいる。しかしそれは、法則自体が全てきれいさっぱりなくなってしまった世界、ありとあらゆるものが、いかなる理由もなく、いつ何時も起こりうる世界ではない。たと

え別の秩序に支配されていたとしても、我々がなおも世界——秩序付けられた全体性——の中に含まれているからこそ、物語は語られうるのだ。個々人は自ら行動することができる——そして殺人を予め計画しさえもする。なぜなら、いつでも自らの行動の結果を予測することができるからだ。他方、エクストロ＝サイエンス・フィクションでは、どんな種類のいかなる秩序も打ち建てることができない。したがって、いかなる物語も語られえない。もしこれが真実なら、エクストロ＝サイエンスの「世界」について語ること自体がそもそも間違っているのだ——というのも、科学をもたすことのできない世界は世界ではなく、純然たるカオス、何物にも秩序付けられない純粋な多様性となるだろうから。これこそがまさにカントの主張であり、ヒュームの問題に対するカントの解決である。すなわち、カントによれば、もし法則が必然的なものでなければ、いかなる世界もいかなる意識も生じえず、一貫性のない純粋な多様体しかなくなるだろう。さて、我々は、このテーゼが疑わしいものであることを示そうとしている。なぜなら、実際には、エクストロ＝サイエンスの世界が、そしてこうした世界が複数あることさえもが、想像可能であるからだ。したがって我々は、以下の二点の確立を試みよう。すなわち、エクストロ＝サイエンス世界を、その可能性を否定することが不可能な世界とすることによって、こうした世界の形而上学的妥当性の確立を試み、またエクストロ＝サイエ

44 ンス世界をフィクションの骨組みの可能な環境とすることにより、その文学的価値の確立を試みるだろう。

3. 超越論的演繹とXSF世界の三つの類型

『純粹理性批判』におけるカントのヒュームの難問への答えは、超越論的演繹の契機、より正確に言うとカテゴリーの客観的演繹の契機に属するものである。これをこの場で詳細にわたって繰り返すことは明らかに不可能だが、とまれその戦略の概要を振り返ってみよう。

カントは確かに、物理法則の必然性に対する我々の信頼の正当性を認めんとする。しかし彼は、ライプニッツのような思弁的形而上学者がやりそうな形でそうするつもりはない。ライプニッツのような人物は、ヒュームの難問に直面すれば、おそらくこんなふうに応えただろう。恵み深き神の存在は証明可能である、神は、あらゆる可能世界の中で最も良い世界——つまり、我々の世界——を創造し、維持するために心血を注いでおられるのだから、と。この観点からすると、世界の恒常性は、それ自体絶対者(神)の叡智と慈愛のおかげなのだ。周知のとおり、カントはこうしたやりかたで取り組みはしない。彼は一般にあらゆる思弁

的思考形式を拒否するからだ。彼の戦略はむしろ、物理法則の恒常性の背理的証明を試みるというものだ。この証明は以下のように要約できる。ヒュームは、物理法則の純然たる非・恒常性に基づき、彼が想像するようにと提示したビリヤード玉が突拍子もない軌道をとらうる可能性が、何によって排除されるのかを問う。カントの解決の原理は次のようである。我々が想像しているこの場面は、実際には決して知覚されえない。なぜなら、このような場面を可能にするもの——自然法則の偶発性——は、対象のあらゆる知覚、あらゆる意識を不可能にするであろうから。というのも、ヒュームのビリヤード玉の場面が場面として想像可能だとすれば、それはその玉が戯れる「背景」自体が安定しているからである。ビリヤード台や、ゲームの行われるくすぶった部屋、そしてプレイヤー自身——要するにビリヤード玉を取り囲むコンテキスト全体が、法則の偶発性という、前提となる仮説に矛盾しているのだ。こうしたコンテキストは、より広く、玉を取りまく世界、つまり非の打ちどころなく自然法則に従いつづける自然の永続性を証明する。さて、もし自然法則が玉に対して機能しなくなるならば、その法則は全般的に機能しなくなるにちがいない。そして、世界そのものが崩壊し、それとともに、もちろん、そのいかなる主観的表象もが崩壊するだろう。

カントによれば、ヒュームの議論の欠陥は、科学の条件を意識の条

46 件と切り離してしまっているところにある。というのも、ヒュームは、科学が不可能になってしまった世界を我々が知覚している、という状況を提示しているからだ。我々は相変わらず対象——ビリヤード台、玉——を把握することができるが、対象のほうは全く何もできない、という世界である。しかし、カントにとって、科学なき意識とはあらゆる論理的思考の崩壊にはかならない。すなわち、科学の存在しないところには意識も残存しないだろう。これは、そのような科学や自然法則の破綻がある日我々の前に姿を現すということの不可能性を証明するものである。

大まかにいえば、カントのアプローチは以下の通りである。法則が所与のものを支配しなくなり、対象がその恒常性を失うと仮定しよう。すると科学は不可能になるが、我々は決してそのことを知覚できないだろう。せいぜいそれを夢みるのが関の山だ。なぜなら、カントにとって、知覚と夢想との違いは、物理的恒常性に従う対象とそうでない対象との違いのみ（これは彼の観念論の結果なのだが）を経験するからだ。もし自然の事物が因果関係にしたがうのをやめれば、あらゆるものは夢の色合いを帯び、我々は、奇妙な現象を夢でも空想でもなく知覚したのだということを、とにもかくにも確認することがもはやできなくなってしまうだろう。

カントによる演繹のこの局面は、主観的演繹の中での、辰砂についての夢想的場面によって説明される。

もしも辰砂が、あるときは赤く、あるときは黒かったりするならば、またあるときは軽く、あるときは重かったりするならば、あるいはまた、もし人間があるときにはあの動物に、またあるにはこの動物にと姿を変えたりするならば、夏至の日の土地がある時は作物に覆われ、またある時には氷と雪に閉ざされているなどということがあるならば、私の経験的想像力が、赤色の表象によって重い辰砂を思い浮かべる機会を得ることは決してないだろう。

我々はここで、カントによって喚起された想像——そこではあらゆるものが夢という一貫性を帯びる——は、ヒュームによってビリヤードの場面で発動させられた想像、つまり科学外の想像、エクストロサイエンスXSF的想像と同質のものであるということを強調すべきである。カントは、すべに述べたように、ポパーの犯したような間違いをもしや犯してはいない。彼はXSFの問題とSFの問題を混同していない。彼はヒューム自身の土俵——法則なき現実——においてヒュームに向き合っており、自身のカオス概念によってヒュームに反論している。カオスVSカオス、辰砂VSビリヤード。カントのカオスの最初の犠牲は、知覚が幻覚と見分けられなくなるということだ。しかし、カントのカオスは「辰砂」の場面で描かれたそれよりも一層強烈だ。なぜなら、もし法則が消え去るなら、カントにしたがえば、現実はまだ夢と

いう一貫性すら持たなくなるだろうから。夢の中では、まだ事物——分解する辰砂、姿を変える人々、季節が加速する風景——をかりうじて識別することができるのだ。法則なき現実、実際には、あまりにも不安定すぎて、こうした生成中の同一性をぼんやりと思い描くことをも許さない。あらゆるものは崩壊し、時間の中で自己について持つ意識さえも残存しない、なぜなら、自分自身の残留感覚についての記憶が、夢がまだ与えてくれる物事のかすかな残余とともに消え去るからだ。残るのは、意識も一貫性もない、純然たる混沌とした多様体だけだ。

見てのとおり、カントの証明は、事実裏づけられた証明だ。自然法則の偶発性という仮説は、もしそれが真実なら、世界のあらゆる知覚対象の廃止を暗示する。それゆえ、世界の表象がそこにあるという事実は、ヒュームの主張への反証となる。そして、物理法則の偶発性というこの仮説が失効すると同時に、可能な文学ジャンルとしてのXSF的想像もまた、カントのアプローチによって前もって咎めを受けるように思われるということも——この件は後述するが——付け加えられるべきである。なぜなら、こうしたXSF的想像は、何物もその中では他の物との見分けがつかないような純粹なカオス、純粹な多様性という単調さへと墮落する運命にあるように思われるからだ。

にもかかわらず、私の思うには、XSFの想像についてのこの見解は、

カントの解決におけるありうる弱点を突きとめることを我々に許すのだ。というのも、カントの説明するそれよりもはるかに安定した、そしてその上もつと興味深いエクストロ=サイエンス世界を想像することを、どのみち何が妨げるといえるのか？ 実際、不安定な世界ではなく、むしろ必然的法則に従わない世界、あちらこちらで不条理なことが起きるが、全体としては規則的——といっても全くもって必然的な原因過程から生じたのではない規則性ではあるが——な世界を想像することか、なぜ出来ないのか？ 言い換えるなら、実際には規則的であるが、その規則性が必然の法則から生じたのではないような世界が存在しうる、という可能性を除外することを、なにがカントに許しているのか？ 法則なき世界か、なぜ自明のこととして、これほどにも滅茶苦茶に変わりやすいものにならねばならないのか？

カントはいう。我々の世界が必然的法則に支配されていないならば、その何物も存立することは出来ない。しかし我々は、いかなる法則にも従わない世界が秩序ある世界よりもカオス的になるという理由はどこにもない、と答えた。そのいずれか一方であることを妨げるものはまさしく何もないのだから、無差別に、そのどちらでもあり得る状態でなければならぬ。私の目には、カントがここで、必然性なき世界と根源的カオスとの同一性を主張することを彼に許す、ある暗黙の法則に依拠し

ているように見える。それは蓋然性の法則である。カントのここでの推論は、以下の議論に基づいている。すなわち、もし世界から法則が奪われたなら、その最小の構成要素がいつ何時もどんなふうにも振舞うことが出来たなら、その世界が、たとえば我々の知る自然を特徴づけているような恒久的・包括的な種類の秩序を示すとすれば、それはけた外れの偶然だろう、と。しかし、もしこれがカントの論拠であるなら、我々はたやすくこう答えることが出来よう。いかなる法則にも従わない世界が、なんらかの蓋然的もしくは統計学的法則に従わなければならない筋合いはどこにもない、と。世界が、あらゆるまっとうな蓋然性にさえ反して、世界を構成する包括的秩序、しかしそのある種の局面がいつ何時もヒュームのビリヤード玉のように脱線するかもしれない秩序を構成することを、妨げるものは何もない。ここから我々は、超越論的演繹の弱点は、そのXSFの想像の実践が不十分であることに由来するのだと気づく。というのも、一層鋭敏なXSF的想像は、世界が将来無法世界に変容する可能性や、あるいは、そのカオスのディテールが我々にとって明白な仕方ではみえていないにせよ、我々が既にそうした世界に住んでいるという可能性のいずれを除外することをも、カントに禁ずるだろうから。したがって、ヒュームの謎——物理法則の必然性、その未来における持続性をいかに証明するか——に対するカントの解決、超越

論的演繹によるこの解決は、最初に思ったほどは満足のいくものではないようだ。

エクストロ=サイエンス世界の仮説を、今度は、深めようとするならば、意識と科学の可能性の条件は同じ——つまり、物理法則の必然性——であるとするカントの主張が分析に耐えないことがわかるだろう。というのも、我々はこの仮説とあからさまに矛盾する好きなだけ多くの世界をフィクション化することが出来るのだから。

実際、我々はエクストロ=サイエンス世界の三つの類型を思い描くことが出来る。そのうちの一つだけがカントの説明したものに对应し、後の二つは彼の限度ある想像を逸脱している。

類型1の世界:不規則だが科学や意識に影響を及ぼすに足るほどではない、あらゆる可能な世界。科学の行使をまだ許容するため、厳密に言えば「科学外」ではないが、それでも、法則の厳格な必然性が科学と意識双方の存在条件だとするテーゼに反する世界。

このような世界は原因不明の事象を含んでいるが、意識や科学を危険にさらすにはあまりにも「発作的」にしか起らない。こうした事象は、観察はできるが、いかなる規則的なやり方でも再現することができない、因果関係の断絶にある。

こうした世界は科学を危うくすることはない。なぜなら科学は、個々の

証言を生ずることはできてもその再現のプロトコル(実験計画)を生み出すことはできない事象に対して、構造的に無関心であるからだ。このような世界では、もしだれかが、客間のビリヤードの玉が何分もの間ありとあらゆる奇妙な動きをするのを見たと言っても、科学者はそれについて何も言うことはできない——目撃者の誠実さを疑っているからではなく、その人が気でもふれたか幻覚症状を起こしたのだと思っているからですらない。単に、科学というものが、その観測に再現可能性の保証された手続きの余地がないような事象についてはどうすることもできないからだ。ありえそうにない物理的事象に関して、たとえ複数の証言があったとしても、そして、こうした事象が物理学的には実際不条理であるような世界が前提だということになっていたとしても、実験科学は—そうした事象に対して——文字通り——いかなる関係も持ちえない。危くなることすらない。なぜなら、実験科学に固有の領域——再現可能な実験、経験——は、こうしたカオスに直面しても無傷のままであるから。科学にとって、原因のないいかなる発作的な出来事も、存在しないか、まだわかっていない原因がある——それゆえそれ自体としては全く重要でないかのいずれかである。

意識についていえば、それが科学より消滅しやすいという理由はない。夢や幻覚は存在し続けるだろう。それも、不条理な現象の知覚や突然

の産出とは全く異なるものとして存在するだろう。もちろん、原因なき事象の各々の目撃者は、夢や幻覚ではないかと、原則的には自問するかもしれない。しかし、この場合はそうでないと考えられる的確な理由がある。というのも、大部分は規則的なこの種の世界では、事象のコンテキストは夢のコンテキスト(眠っていない、観測の後に目を覚ましたという気はしなかった)や幻覚のコンテキスト(この世界では、幻覚はある種の既知の病理と結びつけられる)と同一ではなかったと考えるからだ。そのうえ目撃者は、ある種の場合、間主観性という基準に訴えることもできるだろう。というのも、これらの事象は大勢の目撃者の前で起こり、目撃者同士で互いに眠っていないと保証しあうかもしれないからだ。

類型1の非因果的世界は矛盾なく考えられるので、これによって、科学も意識も因果法則の厳密な普遍的適用性をその可能条件とはしていないことが示される。

類型2の世界:その不規則性が科学を無効にするには十分だが、意識を無効にするには不十分であるような世界。これが真のエクストロ=サイエンス世界である。

これは、実験室内の実験がきわめて多様な結果をもたらし、自然科学を構成する可能性を無効にしてしまう世界となろう。しかし、同時に——いくぶん矛盾するようでもあるが——相対的な恒常性にもとづい

て、日常生活はなおも可能な世界であろう。「^{アタシジント}事物の偶発的事故」、物質的対象の突然のスリップ——人の生活のすべてを破壊するには稀にすぎないが、科学実験が確信をもってなされるほど稀ではない事故が起きる世界。その誤差は気まぐれなものとなるが、その気まぐれがいかなる隠れた意図性にもよらないような世界。これは、事物の年代記にしかしがみつことができない世界となる。たとえば、我々自身の科学理論の語彙で話すなら、こんな言い方をすることもかもしれない。「○日から△日にかけて、『実験室内』の自然は相対性理論的ではなくなり、ニュートン力学へと回帰した。□日から×日にかけては量子物理学の真の刷新があったが、南半球の実験室においてのみであった」等々。それゆえ、もはや自然の成り行きからきちんとした科学法則を引き出すことはできない。しかし、より厳密に考えよう。実は、いかに明白な不規則性も、見かけの無秩序の下に隠された法則がないということを証明するのに十分ではないのだ。明白な無秩序がどのようなものであれ、いつでも——ベルクソンがライブニッツに倣って強調したように——その中に未知の秩序、あるいは、我々が予期した秩序には一致しない秩序を見出しうるのである。それゆえ、エクストロ=サイエンス世界ではいつでも、自然の年代記の見かけ上の無秩序の背後には、何らかの隠された法則が存在しているのだと想像することができる。しかしこうした世界では、自然界の

とりとめのない変化の下にこうした秘密の法則を探し求めることに固執する者は、我々自身の世界でいまだに人間の歴史の成り行きを説明する定量的法則を追い求めている人々と同じぐらい滑稽に、あるいはむなしく見えるだろう。

こうした世界では、我々は他の車に囲まれたドライバーのような感じで諸々の事物の中心にいる。すなわち、一般には現実側^{リアリティ}の合理的な振る舞いをあてにすることができるが、自然がとりとめのない振る舞いをするのを統御することは決してできない。ちょうど、高速道路の規則を守らないドライバーに横づけになるのを防ぐことが決してできないように。鋭い警戒が、このような自然——突然の「衝突」は免れないが、大部分はまだ予測可能である自然——の帰結となるであろう。路上事故は頻度の法則に従いうる。たとえ正確なリスクの数値が頭にあるわけではなくても、我々はまさにこうした頻度に基づいて警戒を行っているのだ。同じことは、類型2の世界にも言える。現実の振る舞いに対する我々の信用は、たとえひどく不確かなかたちであるにせよ、行動し生活するに足るものだ。より一般的な意味では、自然の規則性は社会の規則性と類似するだろう。つまり、大部分は安定しているが、予測不可能な脱線の可能性はある。

しかし、このような「社会的」予測可能性を類型2の世界に与えること

は、結局、そうした世界では自然科学——統計的なものであれ——の端緒が依然として可能であると認めることにならないだろうか？ 二種類の規則性——類型2の自然と社会——の類似をより正確なものにし、実験科学のない世界の想定を可能にするためには、そこに歴史の次元を加えなければならない。18世紀末の人が、当時のパリにおける馬車の事故のおおよその頻度を数値化しようとしたとしよう。この人が21世紀のパリにおける馬車の事故の数はゼロに近いと知っていたなら、ある世紀から別の世紀にかけて馬の安全性における進歩が大きな躍進を遂げたのだと推論することが出来ただろう。これは、馬車というものが、当時は存在していなかった交通手段のために、パリでほぼ完全に消滅してしまうということを、この人が予期できなかったためである。社会の規則性は、我々が他者の行動に関する定量可能な蓋然性にもとづいて生活することを、個々の事例におけるその予測不可能性にもかかわらず、可能にしている。こうした規則性は、それゆえ歴史的变化の蓋然性と手を取り合っすすむが、この歴史的变化はいかなる定量的法則にも従えないため、いっそう深い意味において予測不可能である。しかし、こうした時代の変化は、実験的な種類の因果法則に刻みつけることこそ不可能ではあるが、社会的規則性のあらゆる痕跡を差し止めてきたわけではなかった。最大の歴史的変動の

さなか、つまりある時代から次の時代への移行期においてさえてある。したがって我々は、同様にこう言うことが出来る。すなわち、類型2の世界の住人もまた、日々の安定の中での漸進的な——しかし全く予期できない——変化と結びついた、「自然の時代の移り変わり」を知っているだろうと。しかし今回は、人が歴史的变化の場合ゆくゆくは感づきうることは違って、こうした変化は、いかなる立証可能な原因からも完全に解放されているのである。これらの変化は、自然のなかに「時代」をもたらすが、そうした時代の長期的変化は短期的な「飛躍」と混ぜ合わされているのだ。

要するに、こういった自然、取るに足らないような気まぐれだの、エポックメイキング画期的な変化だのを起こしうる自然というものは——また、それとともに、科学の可能条件を意識の可能条件から解放することは——矛盾なく考えられる。科学の条件が消滅する世界は、必ずしも意識の条件も同様に無効化される世界であるとは限らない。科学なき意識とは思考の崩壊ではない。

類型3の世界:最後に、エクストロ=サイエンス世界の第3の類型、といっても今回は世界とはいえないかもしれない。というのも、これらは、無秩序な変化があまりにも頻繁に起こるので、カントが客観的演繹において描いたカオスのように、科学の条件も意識の条件もともに無効になっ

た、無法状態の宇宙を表象しているのだから。

58 それゆえ、我々がフィクション化してきた宇宙の三つのカテゴリーのなかで、二つは超越論的演繹に反しており、一つが厳密な意味でのエクストロ=サイエンス世界を構成していることがわかる。すなわち、類型2の世界、XSF-2の世界である。

結論

結びに、XSFはサイエンス・フィクションのような文学ジャンル(少なくともサイエンス・フィクションはジャンルだということに同意するなら)を構成することが出来るのか、という問題に手短かにふれたい。XSFの物語は——いかなる条件のもとに——存在しうるのか?あるいはむしろ、こうしたタイプの物語、「サイエンス・フィクション」と銘打たれつつも、実際には別種の想像に属しているのだと私がここで説明しているような物語は、既に存在しているのか?

XSFの物語を書くことの困難さは——そして、そうした物語に隔絶した異質性を構成することを強いていると思われるものは、一般には語りから省かれるものから出発する、という点である。すなわち、単なる純粋な自

由裁量性ではなく、あらゆる瞬間に繰り返し襲いかかる自由裁量性である。サイエンス・フィクションの読者は、たとえ可能な限り奇想天外な前提を置くことを空想未来小説家に許容する心構えがあるとしても、作者がそれらの前提を厳密に守り抜くこと、そして自らの作った世界に原因も理由もなく断絶を持ち込まないことをやはり期待している。そうした断絶は、物語全体のいかなる面白味も取り去ってしまいかねないからだ。この困難を克服するには、次のような三つの解決(このリストは網羅的とはいえないが)があるように思われる。

1.

第一の解決は、原因や理由のない断絶、説明不可能な物理現象が圧倒的な規模で生じた世界へと主人公を直ちに突き落とす、一種の物理的カタルシスを、一つだけ導入するというものだ。「XSFカタルシス」のスタンダードな小説は、ルネ・ノバルジャヴェルの『荒廃 *Ravage*』である。この小説では、突然電気が存在しなくなり、この現象に対してほんのわずかな説明もなされない。1943年に出版されたこの小説が、当時ペタン元帥によって約束された「大地への回帰」をいやというほど思い起こさせるということは、もちろん一度ならず言及されている。しかし、他にもいろいろ考えられるにせよ、この小説で興味深いのは、歴史的カ

タストロフ——1940年の5月革命における大惨事——と、それに引き
60 続く苦しい体験のひとつ——光の消滅、占領下のパリを襲った16時
間の停電——を、自然へと移し替えているということだ。これは、私が
素描を行った類型2の世界と予期されない歴史的事象との比較の繰
り返しになる。

2.

第二の解決は、ナンセンスだ。もし作家が、荒唐無稽で予測不可能
な状況を生み出そうという遊び心を持つならば、ひとは多様な恣意的
な出来事をたった一つの出来事に還元してしまうのではなく、むしろそ
うした出来事に順応することができる。実際、類型2の世界は、ある種の
コミカルな力、ある種の戯画的な可能性を持っていて、それは存分に
活用できるものだ。ここではダグラス・アダムの『銀河ヒッチハイク・ガイド
Hitchhiker's Guide to the Galaxy』を思い浮かべることが出来よう。この
作品では、極端に突拍子もない事象を生み出すマシンが、ミサイルをク
ジラや一鉢のベチュニアに変えてしまうのだ。しかしここではやはり、偶然
の法則に従い——たとえ気ちがいじみたものであったとしても——確率
論的な推論を許すマシンが問題となるのである。

3.

最後の解決——XSFというジャンルを最も忠実に表している解決は、不
61 確かな現実の物語、現実が徐々に崩壊していき、一日一日と我々にとっ
てなじみのないものになっていくという物語だ。この分野において厳密に
XSFである小説——つまり、状況や登場人物の無法な変質に対してい
かなる説明も与えない小説を、私はいまだ見出していない。しかし、フィリッ
プ・K・ディックの傑作のひとつ、『ユービック *Ubik*』を思い浮かべることが
できるだろう。この作品では、いかなる明白な必然性もないままに、現実が
年老いたり退行したりする。その雰囲気はXSF-2の世界に近い。もっとも、
作者によって与えられた説明——それが、恐ろしい精神力を持った昏
睡中の子供によってゆっくりと貪られていく、冷凍貯蔵された身体の精神
世界の話だという——をわきにおけばということだが。

それゆえ、可能なXSFの物語の三つの解決とは、カタストロフ、ナン
センス、そしてムード小説における恐るべき不確実性、となる。明らかに、
一つのジャンルを構成するに十分なものとは言い難い——この点で
XSFは、ある種の形而上学的重要性は持っているけれども、文学的な
観点からいえばおそらくサイエンス・フィクションほどのポテンシャルを持
たないものである——少なくとも、いつの日か才能ある作家たちが、私
が間違っていることを証明してくれない限りは。

The real Future

エリ・アヤシユ
リアル・フューチャー
現実の未来

1.

予測の汎用図式は、不健全な未来観に通じている。それは、未来の世界を、或いは現在の世界さえをも、諸様態へと還元してしまい、それらの様態に確率測度を押し付ける。

2.

偶発性とは現実的なものだ。図式などではない。偶発性は様態からも、時間からさえも独立している。現在の事物や過去の事物も、本質的になお偶発的なものであるといえる。つまり、その事物がおかれている、もしくはおかれえた他の様態を考慮に入れることなく、それ自体として偶発的であると。

3.

「様態」という観念は派生的なものであり、本源的ではない。ある事物がおかれた様態を同定するためには、付加的な努力が必要となる。事物はその様態を同定することによって、固定し、定義し、バックグラウンドから引き離すことができるのである。

4.
64 原料、あるいは原「存在」は、様態ではない——おそらくそれを事物と呼ぶべきでさえないだろう。それは「マーク」、あるいは「ひらめき」、^{ストライク}「世界はかくある通りである」ことを確かに肯定するも、結局「世界は異なるものであったかもしれない」ことを意味してしまう、ごく迅速な束の間の思考だ。これは世界を認識しているわけではない。「世界は一挙に生じた」^{ストローク}(ボードリヤール)こと、言いかえれば、偶発的であることを、ただ観測しているにすぎない。

5.
偶発のひらめきは、存在に先立ち、存在を一般化する。それは、存在が^{ポジティブ}実際の現存へ、あるいはそれ自身との同一性(A=A)へと結晶する以前に、他の点では無差別的で未異化=未分化な表面上に存在のひらめきが残す、そのマーク、刻み目あるいは跡がまずある、という、束の間の思考だ。存在がもたらす差異、それは、存在が後にそうなるところの同一性、ないし様態に先だって到来するものなのである。

6.
私の求めるまなざしの回心(かなり困難で、反直観的なものであることは認めるが)は、^{ディファレンシャル}存在の差異化のマーク(「これはこれ」)の中に、存在とは何かという認識や再確認ではなく、存在を最終的に思考と存在との相互作用の中に閉じ込める内省的思考でもなく、この存在が違うものであったかもしれないというむき出しの暗示を見ることにある。

7.
他の点では均一で未異化=未分化な表面上に残されたあるマークを見つめるには、二つのやり方がある。その事物あるいはその対象を^{ポジティブ}積極的に指し示すものとして(そのマークは何か、どういう意味か)。あるいは、それ以前に、ごくミニマムに、何か目立ったもの、^{リマーカーブル}単なる表面上の偶発事、ほかでもないこの形をしたマーク、あるいはまた、マークの^{コンティンジェンシー}偶発性を、ただ指し示すものとして。デリダならこうであろう、^{マーク}標記は存在よりも古いのだと。

8.
66 同様に、関数 $y=f(x)$ とその写像、あるいは図表を見るやり方には二通りある。我々は、関数とは確かに、 x_1 に割り当てられた y_1 の値と x_2 に割り当てられた y_2 の値、などの差異を正確に教えてくれる、一連の完全な指示として書かれている、と推論する(この場合、書かれたものは単なる差異の分配と配分にすぎない。それは差異の予定である)。あるいはまた、成し遂げられた結果からみて、関数を完了したひらめきとみなす。つまり、最終的に出てきた y のみに目を向け、 y は異なる値だったかもしれないという考えを我々に強いてくる限りにおいてのみ、その関数を「思い出す」。

9.
図表を積極的に見ること、すなわち、書かれた指示を通して x から y へ行くことは、関数を持ちうる可能な値に目を向けることだ。何物も区別されない。それらはすべて可能である。何物も現実的でない。それに対し、反対方向から見ることは、(可能なものとは対照的に)現実的なものから出発して、その関数を思い出すことだ。もはや決定的に過ぎ去り成し遂げられた可能性を蘇らせるためではなく、現実の値の偶発性を強調するために。

10.
積極的な意味において、書くことは単なる予定にすぎない。反対の意味で、それは有形のマーク、その差異がその書かれる有形の紙と分離不可能な、後戻りのできない契約である。我々は論理空間もしくは超越次元における正の写像の異なる割り当てを考え予想することが出来る一方で、偶発的なマーク自体の内在的空間におけるそのマーク固有の差異——それは、私の考えでは、交換でしかありえない——をただ感じ取ることが出来るのみである。条件付請求権は、それが市場で交換=取引される限りにおいてのみ書かれる=売られる。そして、私が論じるまなごしの回心とは、書かれたものを、それが識別を助けている状態における派生物として見るのをやめて、絶対的に見始めること、つまり有形の紙だけが本質的に伝えることのできる絶対的なマークないし差異として見ることなのである。

11.
積極的な意味での図表、あるいは正関数が表現する類比的差異は、もっぱら次の二つの思考の傾向同士の相互作用においてマークされる。すなわち、値の変化を隠れた変数の変化との類似に基づいて導く差異的=微分的な傾向(いわゆる「関数の微分」と、前者の逆数であり(い

わゆる「関数の積分」^{インテグラル}）、異なる類比的な様態と値を単一の積分値と単一の現在の様態の中で合計する、^{インテグラル}全体的=積分的な傾向である。確率とはひとつの積分でしかない。

12.

対照的に、偶発的な^{コンティンジェント}=条件付請求権のマークは、内的な(つまり類比的なものではない)差異を表す有形の紙と、交換=取引の場との相互作用においてのみ価格づけされる。この取引の場は、いかなる積分的傾向にもいかなる思考の統合的反射運動にも従わないが、反対に、さらに進む価格の^{ディフュージョン}差異化=微分と、「トレーダー集団」との思考の取引にのみ従う。取引は思考されるべきものではない。それは思考の対極にある。

13.

^{コンティンジェント}条件付請求権のマークは、計算=予測不可能なものだ。世界はそこにある。それは偶発的であり、それを計算可能で回顧可能な可能性から生み出したとみなされている関数を、我々は本質的に「忘れて」しまった。^{リアル}奇妙に思われるかもしれないが、^{アクチュアル}現実の現働的な世界は予測不可能なものだと、私は考える。それが未来の未定のものだとされるからではなく

——実際、そうではないのだ——、同定可能な確定した様態には還元できないものだからだ。実際、世界の生成関数は忘れられてさえない。それは単に、存在しないのだ。 69

14.

ルーレットの円盤の勝ち数字を、計算=予測可能なもの、隣の数字と交換可能なものとするのは、人為的なやり方においてしかない。しかしながら、ひとたび^{コンティンジェント ストローク}世界の偶然の巡りあわせがマークされ、ルーレットの玉が円盤のポケットの一つに定置したなら、出来事のフィルムを巻き戻したいと思った時に変えることのできる諸々の世界の様態と、固定したままでなければならぬ世界の様態との間に線を引くことが誰に出来るだろう？ 偶然の巡りあわせには、いかなる様態の線引き=限界もない。ルーレットの^{フォート・ファイニッシュ}円盤の写真判定には、同時に起こる全世界が含まれている。

15.

同様に、未来の世界もまた^{リアル}現実的であり、同じ意味で予測不可能なものだ。しかしながら、それは^{アクチュアル}現働的なものではない。これが混乱を招くものとなるのだ。未来の世界の予測不可能性を、^{アクチュアル}現働的な世界のそれを理解すると同じ意味で、つまり様態の限界=線引きの不在として理解す

70 かわりに、我々はそうした未来の様態が存在するものと考え、未来の世界はただそれがいずれの様態に定置することになるか分からないというだけの理由で予測不可能なのだと考える。言い換えれば、我々は未来の世界を、現実的ではなく^{リアル}可能的なものだと考える。

16.

^{リアリティ} ^{ノン・アクチュアリティ} 現実とは非・現働性と相容れないわけではない。現働的ではない現実なるものとは、バルクソンとドゥルーズが^{ヴァーチャル}潜在的と呼んだところのものである。市場とは^{リアル}現実的なものであって、^{リアル}可能的ではない。それは未来の偶発的世界の^{リアル}現働的な^{リアル}現実の予測であるが、^{リアル}可能性の経路には従わない。むしろ、^{メディア}条件付請求権の価格という媒体に従うのである。市場は^{リアル}未来の世界の^{リアル}現実をその^{リアル}現働性から切り離す。したがって、市場は^{リアル}ただ^{リアル}現働性を^{リアル}予測し、^{リアル}現実を維持する。別の言い方をすれば、未来の世界はあらゆる点から見て、現在の市場と同じぐらい^{リアル}現実的である。

17.

^{コンティンジェント} 条件付請求権のマークが計算=予測不可能で、全世界のバックグラウンドとそのあらゆる巡りあわせから切り離せないのと同じ理由で、価格は計算=予測不可能だ。たとえばバニラ・コール・オプションのストライク

の予測とは、隠れた^{リアル}可能的様態の樹形図以上のものではない、我々はコールを確率論的に値踏みするために、この樹形図から巻き戻って考えるのだと前提するのは、^{リアル}確率論だけだ。ルーレットの円盤から、対応する可能性の樹形図に巻き戻って考えることには何の問題もない。というのも、確率論にインスピレーションを与えたのはそもそもルーレットのようなゲームであるから。しかし、コールのストライクから樹形図に戻ってくるというのは大いに問題である。

18.

コール・オプションの^{ストライク}権利行使(すなわちその満期)を現在のスポットと分かつのは、市場全体および市場におけるその^{リアル}コールの^{リアル}現実的な取引価格である。それらの価格に対して自らの樹形図を^{リアル}キャリブレート・再キャリブレートするとき、我々は、他のあらゆる条件付請求権の他のあらゆる価格によって自らがただちに影響を受けていることに気付く。ブラック=ショールズ=マートンの公式に基づいてインプライド・ボラティリティ(予想変動率)を求めることにより、我々はスマイル・モデルに導かれる。スマイル・モデルの再キャリブレーションとスマイル・ダイナミクスの不確定性は、ダイナミクスをより明確にするために再キャリブレーションにエキゾティック・オプションを含めることにつながり、したがってバニラ・オプションのスマイルをエキ

ゾティック・オプションのスマイルへと拡大することにつながる、等々。まもなく、「哀れな」バニラ・オプションのマーケット・メーカーは、取引するすべてのもの（バリアー・オプション、クリケッ、バリエーション・スワップ、バリエーション・オプション等）の価格を含めるより他に、自身のオプションを価格付けしたりヘッジしたりする方法がないことを悟る。いっそう悪いことに、そうした他のエキゾティックの価格が実際には存在しない場合、彼は実質上それらに対してキャリブレーションを行わなければならない。つまり、彼はそれらの価格を自分自身で発行し、事実上エキゾティック・オプションのマーケット・メーカーとならねばならない！

19.

したがって、価格とは計算=予測不可能なものであり、未来の偶発性を前もって予測することが不可能であることの表現である（未来の偶発性は単に未知だから予測不可能だという紛らわしい意味においてではなく、限定された状態に還元することが出来ないという意味での、予測不可能性）。しかし、我々はどのようにして価格を扱うのだろうか？ 何らかの方法で樹形図の中で価格を計算しなくてもいいのだろうか？ いったいどうやって未来の偶発性を未来の一連の可能性に還元してしまうことを免れうるのか？ 答え——動的レプリケーション（複製）によって。

20.

未来の偶発性の巡りあわせの予測不可能性と無・限界を現在のスポットに引きずり込むのが、動的レプリケーションである。私の考えでは、条件付請求権の価格設定の道具は（たしかに樹形をしているが）確率論の道具ではない。それらは、動的レプリケーションを導入するための道具なのだ。動的レプリケーションは大変革をもたらすものである。マーケット・メーカーが、ただ動的レプリケーションの指示によって立会所にしばりつけられているがゆえに、彼は条件付請求権の満期時における偶発の巡り合わせ（および対応する偶発的な世界）を前もって複製するのだ。

21.

動的レプリケーションという道具を手にして条件付請求権の現在の市場価格に向き合うことは、条件付請求権が最初に有形の紙に書かれた時にその差別的なマークディファレンシャルに向き合っていたのと同じことだ。条件付請求権のマークの絶対的差異コンティンジェント（状態や関数の写像によって媒介されるのではなく、値が異なるものだったかもしれない、ただミニマムに反復するもの）は、ヘッジ・リバランシングの行為の撤回不可能性として再表現される。（異なる言い方をすれば、動的レプリケーションは単にペイオフをレプリケー

トするだけでなく、ヘッジのリバランスの撤回不可能性をもレプリケートし、満期
74 までの時間を廃し、条件付請求権があたかも今満期になっているようにする。) 価
格設定の道具をその価格に対して反転させ、それによって市場の無限
性と限界=線引きのなさに門戸を開き、それによって道具をキャリブレ
ート・再キャリブレートする資格があるのは、ひとえに、条件付請求権を動
的にレプリケートする(それゆえそれを書き換える)からである。

22.

再キャリブレーションとは、樹形図がその枝と確率論的推移をさらに延
長するために帯びねばならなかったいかなる傾向をも、たえず蝕むもの
である。再キャリブレーションとは、価格の計算=予測不可能な特性(す
なわち、決してなんらかの樹形のアルゴリズムの出力としてではなく——もっとも、あ
らゆるアルゴリズムは樹形をしているが——、常にそれをもとに再キャリブレーシ
ョンを行うための入力として、市場によって与えられる存在であるという特性)を再
確認するものである。

23.

一言でいうと、未来は可能性や確率によって処理するにはあまりにも大
75 大きく、あまりにも現実的すぎる。それは現実に、かつ物質的に扱われる必
要があるのだ。我々が未来を処理するためにこれまでにひとまずとめるこ
とのできた、物質的技術論は、きわめて幸運な状況(あるいは偶然の一致)
から利益を得ている。これは、我々が価格あるいは市場と呼ぶものを生
み出すために、貨幣を印刷する、条件付請求権を書く=売る、それら
すべてを交換=取引するという行為が一緒になった状況である。この状
況に時間(計量的で無益な時間ではなく、偶発のひらめきストライクの日々の反復という意
味での時間)を偽りなく注入するために欠けている唯一のものが、動的レ
プリケーションである。市場での、つまり理論上のものではない、動的レ
プリケーションだ。

24.

我々は、未来を作り上げる現実リアルの材料を理解するために、条件付請求権
とその価格設定の技術論の究極の洗練への回り道を必要とした(その哲
学的思考の洗練はいうまでもない)。価格と市場を、厳密には数を超えたところ
にあるものへと一般化するまで。実際のところ、現実リアリティの「市場」一般とは、
どんなものであろう?

Bibliography

D. Adams [1979] *The Hitchhiker's Guide to the Galaxy*
(NY/London: Pan, 2009)

I. Asimov [1967] 'The Billiard Ball', in *The Complete Stories Vol. 2*
(NY: Doubleday, 1992)

E. Ayache [2010] *The Blank Swan: The End of Probability*
(Chichester: Wiley, 2010)

R. Barjaval [1943] *Ravage* (Paris: Gallimard, 2007),
translated by D. Knight as *Ashes, Ashes* (NY: Doubleday, 1967)

P. Churchland [1979] *Scientific Realism and the Plasticity of Mind*
(Cambridge: Cambridge University Press, 1979)

G. Deleuze [1968] *Différence et répétition* (Paris: PUF, 1968),
translated by P. Patton as *Difference and Repetition*
(London/NY: Continuum, 2004)

P. K. Dick [1969] *Ubik* (NY: Vintage, 1991)

- D. Hume [1748] *An Enquiry Concerning Human Understanding*
(Indianapolis: Hackett, 1993)
- I. Kant [1781/1787], *Critique of Pure Reason*
(Indianapolis: Hackett, 1996)
- R. Mackay [2010] 'These Broken Impressions' in F. Hecker, *Event, Stream, Object* (Frankfurt: MMK Museum für Moderne Kunst, 2010)
- R. Mackay (ed.) [2011] *The Medium of Contingency*
(Falmouth/London: Urbanomic/Ridinghouse, 2011)
- Q. Meillassoux [2006], *Après la finitude: Essai sur la nécessité de la contingence* (Paris: Seuil, 2006), translated by R. Brassier as *After Finitude* (London/NY: Continuum, 2010)
- J. Millar [2010] *Every Day is a Good Day*
(London: Hayward Publishing, 2010)
- E. Nagel and J.R. Newman [1959], *Gödel's Proof* [1959]
(London: Routledge, 1976)
- K. Popper [1972] *Objective Knowledge*
(London: Clarendon, 1972)
- C. Roads, *Microsound* [2001] (Cambridge, Mass.: MIT Press, 2004)
- B. Russell [1914] *Our Knowledge of the External World*
(London: Routledge, 1993)
- J. Sellars [2003] *The Art of Living: The Stoics on the Nature and Function of Philosophy* (Aldershot: Ashgate, 2003)
- J.-R. Vernes [2005] *Le principe Pascal-Hume et le fondement des sciences physiques* (Paris: Harmattan, 2005)

Colophon

Speculative Solution & 3 Channel Chronicles

執筆・制作: フロリアン・ヘッカー

2009年3月—2010年11月

編集: ロビン・マッケイ

日本語翻訳: 神保夏子

レイアウト: ティナ・フランク、エルヴィア・ステイン、小原亘

© 2012 Florian Hecker, the authors, Editions Mego, Urbanomic,
Museum of Contemporary Art Tokyo謝辞(順不同): エリ・アヤシュ、ウテ・メタ・バウアー、ノバーバラ・クラウセン、
ティナ・フランク、クリストフ・ガーク、長谷川祐子、
アキーム・ホフデルファー、ロビン・マッケイとUrbanomic社スタッフ、
INSTAL(グラスゴー)のプロイニー・マッキンタイとバリー・エッソン、
カンタン・メイヤスー、キンモ・モディグ、ピーター・レンバーグ、
ホアオ・リバス、マリオ・デ・ベガ、吉崎和彦

ISBN 978-0-9567750-3-0

この印刷物は、東京都現代美術館で開催される「東京アートミーティング[第3回]
アートと音楽——新たな共感覚をもとめて」(2012年10月27日—2013年2月3日)のため
に制作された。原本は*Speculative Solution* (Mego 118、ウィーン/Urbanomic UF13、
ファルマス、2011年)の一部として出版された。*Speculative Solution and 3 Channel Chronicles*

Written and produced by Florian Hecker,

March 2009 – November 2010

Booklet edited by Robin Mackay

Japanese translation by Natsuko Jimbo

Typesetting by Tina Frank, Elvira Stein and Wataru Kobara

This edition © 2012 Florian Hecker, the authors, Editions Mego,
Urbanomic, Museum of Contemporary Art TokyoAcknowledgements: Elie Ayache, Ute Meta Bauer, Barbara Clausen,
Tina Frank, Christoph Gurk, Yuko Hasegawa, Achim Hochdörfer,
Robin Mackay and all those at Urbanomic Falmouth,
Bryony McIntyre and Barry Esson at INSTAL Glasgow,
Quentin Meillassoux, Kimmo Modig, Peter Rehberg,
João Ribas, Mario de Vega, Kazuhiko Yoshizaki

ISBN 978-0-9567750-3-0

This publication is produced on the occasion of the exhibition *Tokyo
Art Meeting (III) Art & Music – Search for New Synesthesia*, October
27, 2012 – February 3, 2013, Museum of Contemporary Art Tokyo.
Originally published as part of *Speculative Solution*, Editions Mego
118 / Urbanomic UF13, Vienna / Falmouth, 2011.